

寒山拾得

芥川龍之介

青空文庫

久しぶりに漱石^{そうせき}先生の所へ行つたら、先生は書齋のまん中に坐つて、腕組みをしながら、何か考へてゐた。「先生、どうしました」と云ふと「今、護国寺の三門で、運慶が仁王を刻んでゐるのを見て来た所だよ」と云ふ返事があつた。この忙しい世の中に、運慶なんぞどうでも好いと思つたから、浮かない先生をつかまへて、トルストイとか、ドストエフスキイとか云ふ名前のはいる、六づかしい議論を少しやつた。それから先生の所を出て、元の江戸川の終点から、電車に乗つた。

電車はひどくこんでゐた。が、やつと隅の吊革^{つりかは}につかまつて、懷に入れて来た英訳の露西亞^{ロシア}小説を読み出した。何でも革命の事

が書いてある。労働者がどうかしたら、気が違つて、ダイナマイトを抛りつけて、しまひにその女までどうかしたとあつた。兎に角万事が切迫してゐて、暗澹たる力があつて、とても日本の作家なんぞには、一行も書けないやうな代物だつた。勿論自分は大に感心して、立ちながら、行の間へ何本も色鉛筆の線を引いた。

所が飯田橋いひだばしの乗換でふと気がついて見ると、窓の外の往来に、妙な男が二人歩ふいてゐた。その男は二人とも、同じやうな襷ぼろ褌ぼろ々の着物を着てゐた。しかも髪も髭ひげものび放題で、如何にも古怪な顔つきをしてゐた。自分はこの二人の男に何処かで遇あつたやうな気がしたが、どうしても思ひ出せなかつた。すると隣の吊革に

ゐた道具屋じみた男が、

「やあ、又寒山かんざんじつとく拾得が歩いてゐるな」と云つた。

さう云はれて見ると、成程その二人の男は、箒はうきをかついで、巻物を持つて、大雅たいがの画からでも脱け出したやうに、のつそりかんと歩いてゐた。が、いくら売立てが流行はやるにしても、正物しやうぶつの寒山拾得が揃つて飯田橋を歩いてゐるのも不思議だから、隣の道具屋らしい男の袖そでを引張つて、

「ありや本当に昔の寒山拾得ですか」と、念を押すやうに尋ねて見た。けれどもその男は至極家常茶飯かしやうさはんな顔をして、

「さうです。私はこの間も、商業会議所の外で遇ひました」と答へた。

「へええ、僕はもう二人とも、とうに死んだのかと思つてゐました。」

「何、死にやしません。ああ見えたつて、ありや普賢ふげんもんじゆ文殊もんじゆです。あの友だちの豊干ぶかん禪師ぜんしつて大将も、よく虎に騎のつちや、銀座通りを歩いてますぜ。」

それから五分のちの後、電車が動き出すと同時に、自分は又さつき読みかけた露西亞小説へとりかかった。すると一頁と読まない内に、ダイナマイトの臭ひよりも、今見た寒山拾得の怪しげな姿が懐しくなつた。そこで窓から後うしろを透して見ると、彼等はもう豆のやうに小さくなりながら、それでもまだはつきりと、朗ほがらかな晩秋の日の光の中に、箒をかついで歩いてゐた。

自分は吊革^{つりかは}につかまつた儘、元の通り書物を懷に入れて、家^{うち}へ歸つたら早速、漱石先生へ、今日飯田橋で寒山拾得に遇つたと云ふ手紙を書かうと思つた。さう思つたら、彼等が現代の東京を歩いてゐるのも、略々^{ほぼ}無理がないやうな心もちがした。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：浅原庸子

2007年4月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

寒山拾得

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>